

ある人画所土佐守に画を望けるに、折ふし眠りながら筆をとり、くるくるとまはしてさつと画て、これこれとてふせりける。何のかたちともがてんゆかず。いやいやこれは紫野の休和尚に賛を乞て掛物にせんと、大徳寺へ行、此画八土佐守にかかせしが、さらに此水の中の物しれず。休和尚見給ひ、賛望ならばしてとらせんとて

水の中に物あり。その一物をとへば、かきし画工もしらず。持主もしらず。賛する我はなをしらず。

これを見る人聞く人、さてもまつすぐなる御心ばせや、これ三国一の掛物なるべしと、いよしよ重宝となる。今におるて此かけ物ただうどの手にはあらずとかや。